

博士(文学)学位請求論文審査報告要旨

論文提出者氏名	宮谷 聡美
論文題目	歌物語史から見た伊勢物語
審査要旨	
<p>本論文は、『伊勢物語』を主たる研究対象としている。『伊勢物語』は百二十五の章段（定家本）におよぶ小さな物語を集めた短編物語集といえるが、それぞれの物語の内容、形式、分量などは実にさまざまであり、成立過程も複雑であったと想像される。かつては三段階成立論（片桐洋一）をめぐる議論が盛んであったが、「原－伊勢物語」のようなものを解明することには限界がある。本論文では、『伊勢物語』の成立過程ではなく、その文学史上における位置を明確にしてゆこうとする立場から、まずは、(1)『伊勢物語』における表現の特質の解明がめざされる。あわせて、平安時代前期における和歌と仮名散文とのかかわりの中からどのようにして仮名の物語が拓かれてゆくのかという問題意識のもと、(2)『伊勢物語』をふくむ歌物語から平安時代の文学史をとらえることが試みられている。</p> <p>本論文は、これら二つの課題に対応する二部からなっている。すなわち、「第一部 『伊勢物語』の主題と形成」と「第二部 歌物語の文学史」である。全体の分量は400字詰原稿用紙換算で800枚ほどにおよぶ。以下、各章ならびに各節における論述の要点を整理しておく。</p> <p>「第一部」では、まず「第一章 「よむ」歌と「いふ」歌」で、『伊勢物語』における和歌への意識について考察されている。歌を「よむ」のか、それとも「いふ」のかという問題については、従来、公的な晴の歌、披講に値するような歌にこそ「よむ」が用いられるとされてきたが、この章では『伊勢物語』内における用例の精緻な検討から、『伊勢物語』にあっては元々「いふ」が用いられる傾向のつよい私的な歌、褻の歌であっても、他者と心を通いあわせられる秀歌においては「よむ」が用いられ、心を通いあわせられない歌には「いふ」が用いられるといった使い分けがなされていることを解明している。またそのことから、歌の位置づけと、物語展開との間の明確な対応基準があることが想定されるという。</p> <p>つづいて「第二章 『伊勢物語』と和歌・漢文学」では、『伊勢物語』の表現の特質として、『万葉集』『古今集』などの和歌、ならびに漢文学とのかかわりに注目し、その表現の特質をとらえている。とりあげられる章段は六つで、いずれも『伊勢物語』の中で特に著名であるとともに、ある程度の長さを有する章段である。第一節の六段「芥河」論、および第二節の二十三段「筒井筒」論では、『万葉集』にみられる歌との関わりが論じられる。次いで六十三段「つくも髪」を論じた第三節においては、宋玉「登徒子好色賦」をもとにした『万葉集』の石川女郎と大伴田主の「みやびを問答」との関わりを考察するとともに、長編物語への契機がとらえられている。第四節の六十九段「狩の使」は、『鶯鶯伝』および『遊仙窟』との関わりが指摘されてきたが、『万葉集』などとの関わりにも注目して、漢籍の知識と和歌の伝統との融合が重視される。第五節では八十七段「蘆屋の里」がとりあげられ、隠れたキーワード「白玉」による場面の関連づけなどの意欲的な創作方法がとらえられる。第六節では百七段「涙河と身を知る雨」について、和歌の不確実性を問題提起しているといった可能性が指摘される。</p> <p>次の「第三章 『伊勢物語』と歌謡」は歌謡からの影響をとらえた二つの節からなる。第一節では百二十一段「梅の花笠」が、また第二節では八十一段「かたみ翁」がとりあげられている。特に後者では、藝能を司る「翁」の役割と、在原業平当人が歴任した官職に結びつくイメージとの関わりなどが論じられている。</p> <p>つづいて「第二部」であるが、「第一章 『伊勢物語』長編化の方法」では、まず三つの節で『伊勢物語』の内部にみられる短編物語および長編物語の形成史をたどることが試みられている。第一節では四十四段と四十八段の短編の形成が、第二節では歌の連続による物語の長編化がそれぞれ論じられ、</p>	

氏名 宮谷 聡美

第三節では六十五段「在原なりける男」の長編化の方法がとらえられる。さらに第四節では、『伊勢物語』を継承する物語として、『平中物語』と『一条摂政御集』の冒頭「とよかげ」を対比的にとらえる。

「第二章 『うつほ物語』の和歌と歌物語」では、長編『うつほ物語』の中から、特に源実忠をめぐる物語（実忠物語）における長歌の意義（第一節）、ならびに実忠物語にみられる歌物語の継承という問題（第二節）が論じられる。さらに第三節では、源仲頼と妻をめぐる物語において、歌物語の型を利用しつつ「歌を持つ物語」へと展開しているということが論じられている。

最後の「第三章 平安後期物語と中世王朝物語における和歌の位置」は、『伊勢物語』六十五段と『狭衣物語』における源氏の宮の物語との関わりを論じた第一節、ならびに中世王朝物語における和歌のあり方と意義をとらえた附節からなる。

以上が本論文の要点である。従来の『伊勢物語』研究史をふまえながらも、『万葉集』『古今集』などにみられる歌とのかかわり、また漢文学、歌謡の摂取のしかたなどに関する新見を示しつつ、とりわけ個々の物語がどのようにして形づくられ、さらには長編へと向かってゆくのかということが丁寧に論じられている。また、歌物語としての『伊勢物語』の要素が、それ以降の文学においていかにひきつがれているのかという課題についても、特に『一条摂政御集』の「とよかげ」、また『うつほ物語』における実忠・仲頼の物語、さらには『狭衣物語』の源氏の宮をめぐる物語などを検討の対象として論じられ、長編物語の生成へと至る過程が跡づけられている。このような、歌物語を軸に据えた文学史の把握という試み自体に、これまでの研究を超えるあたらしさがあるといえるだろう。

ただし、審査委員からはあわせて次のような課題も指摘された。

- ・平安時代前期、『伊勢物語』が成立する時期において、歌、さらには書物がどのように流通していたのか、という視座がほしい。
- ・短編章段の位置づけ（第二部－第一章－第一節）は、斬新ではありながら、『伊勢物語』以外との相互作用などにも留意する必要があるのではないか。
- ・「かはらけ」に書かれた歌の論（第二部－第二章－第二節）などは、歴史的遺物に関する最近の研究とも関わりがあるので、それらについての言及も望まれる。
- ・「歌語り」と「歌物語」との違い、またあえて「歌語り」を考察の対象から外していることについての説明がほしい。

このように今後へのこされた課題もあるわけだが、本論文が、『伊勢物語』の最新の研究としてのプライオリティをもつとともに、歌物語を軸にして平安時代前期から後期、さらには鎌倉時代までの仮名散文の文学史をとらえてゆくという姿勢であらたな知見を提示していることは明らかである。よって、本論文を博士学位論文にふさわしいものと判断した。

公開審査会開催日	2020年 1月 29日			
審査委員資格	所属機関名称・資格	氏名	専門分野	博士学位
主任審査委員	早稲田大学文学学術院・教授	陣野 英則	平安時代文学・物語文学	博士(早稲田大学)
審査委員	早稲田大学文学学術院・教授	兼築 信行	和歌・文献学	
審査委員	早稲田大学文学学術院・教授	高松 寿夫	日本古代文学	博士(早稲田大学)
審査委員				
審査委員				